九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国・南京市の小学生の遊びの実態

李，仲滨

楊，暁紅

横山，正幸

https://doi.org/10.15017/9061

出版情報：生活体験学習研究. 5, pp.43-53, 2005-01-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第５号　43―53（2005）

中国・南京市の小学生の遊びの実態

李　仲滨・揚　暁紅・横山正幸

A Study on Children's Free Time "how elementary school children of Nanjing city in China spend their free time"

Li　Zhongbin・Yang　Xiaohong・Yokoyama　Masayuki

要旨　本研究の目的は、中国・南京市の小学生の遊びの実態を明らかにすることである。対象は小学校の４、５年生473名。調査は質問紙によって行った。調査の内容は、①遊ぶ友達の人数、②友達との関係、③遊び場、④情報機器による遊び、⑤外遊びの時間、の５つの事項である。主な結果として、①学校で遊ぶ友達の人数は３人以上が男女とも80％以上おり、友達の全くいない子はほとんどいない。これに対して、地域での友達の人数は学校より少ないこと、②多くの子は友達との関係に関して、積極的で、望ましい状態にある。しかし、なかには自分から仲間に入れない子や異年齢の子と関わりをもっていない子が少なからずいること、③遊び場としては「自分の家」が圧倒的に多い。但し、「友達の家」は日本の子ども達ほど多くはないこと、④テレビゲームをしたり、テレビを見て過ごしている子は、日本の子ども達に比べてはるかに少ないこと、⑥外で遊んでいる時間は、１時間以内が男子で47.5％、女子で38.8％である。外遊びを「全然していない」子も男子で17.8％、女子で28.4％いること、などが明らかとなった。

Ⅰ．はじめに

子どもの遊びには、楽しさを与えてくれると同時に次のような発達的な意味がある。

①　社会性、協調性、人間関係能力などを育む。

②　生きた知識、生活の知恵を育む。

③　体力・運動能力・器用さを育む。

④　自主性、耐性、創造性、思いやりの心などを育む。

そして、さらに忘れてならないのは次の効用である。

⑤　心の緊張を解消し、精神衛生をよくする。

子どもだって悲しいこと、腹のたつこと、不安なことなど色々ある。しかし、時間を忘れ、夢中になって友達と遊ぶなかで、そうした心の緊張、いわゆるストレスを解消し、心の健康を維持するのである。

ところが、日本では、この大切な遊びが今や「無遊病の子ども達」とか「巣ごもりする子ども達」と言われるように、子どもの生活から完全に抜け落ちてしまっている。

山添正ら（1992）は、山梨県内で三世代の遊び時間・遊び場所・遊び仲間についての実態調査を行っている。10年ほど前の調査であるが、当時の子ども達においてさえ、男子で10.3％、女子で25.8％が遊び時間がほとんどないと回答している。父母の世代や祖父母の世代に比べ、長時間遊ぶ子どもが明らかに減少しているのである。また、主な遊び場所は約４割が室内で、父母や祖父母の世代に比べて、外で遊ぶことが非常に少なくなっている。さらに、遊び仲間の人数も１人ないし２人が約４割を占め、父母や祖父母の世代に比べて、

連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
（〒811-4163 宗像市自由ヶ丘2-12-28　ユリ団地403　李仲滨）
（Yuri-danchi 403, 2-12-18 Jiyugaoka, Munakata-shi, Fukuoka Pref., 811-4163）

小さくなっている。

こうした状況は、今や特定の地域の傾向ではない。大都会はもちろん自然豊かな農村部に行っても子ども達の遊ぶ声を聞くことはまずない。もちろん、今の子ども達も全く遊んでいないわけではない。室内で１人でテレビを見たり、テレビ・ゲームなどして過ごしている子はいっぱいいる。問題は、外で大勢の仲間達と活動的な遊びをしている子がほとんどいない点である。例えば、青少年文化研究会（1996）が小学５年生を対象に行った調査によると、「昨日、友達と外で遊んだ」かどうか尋ねた質問に対して男子の62.7％、女子の69.0％が「ほとんどしなかった」と答えている。また、北九州市教育委員会（2000）の調査によると、「きのう、学校から帰って友だちと遊んだ時間について」小学５年生の54.4％が「ぜんぜんしない」と答えている。

幼児教育の権威、平井信義（1989）は「当時（1947年頃）の子どもたちのいきいきした活動を思い返すと、昨今の幼稚園や保育所の子どもたちの姿は、じいさんか婆さんのように思えることさえある。」(「新しい幼児教育のために」）と述べている。幼児でさえこうである。エネルギーに満ちているギャング・エイジの子ども達の状態は悲惨でさえある。今や、子ども達が仲間と夢中になって遊び、心から笑ったり、怒ったりする表情を見ることはめったにない。

では、なぜ日本の子ども達は遊ばなくなったのであろうか。様々な理由が考えられるが、その一つは子どもの行動に対する親や教師による過保護や過剰な干渉である。結果として、子どもの遊ぶ意欲が奪われてしまった。しかも、異年齢での遊びがなくなったために遊び方の継承がなされていない。そのため時間があっても、仲間がいても、場所があっても今の子ども達は自分達で遊ぶことができない。ちなみに小塩節(1997)によると、東京の戦前の子ども達は4000種類の遊びを知っていたという。それが今や20種類だという。実際、ベネッセ教育研究所（1999）の調査によると、石けりをほとんどしたことのない子が小学５、６年生で79.7％、ゴムとびについては84.5％もいる。そして、何をして遊んだらよいかわからないことが「よくある」「ときどきある」子が38.7％であった。

このように、日本の子ども達は遊ぶ時には思いっきり遊ぶという「当り前の生活」が保障されていないのである。結果として、ストレスが発散できず、イライラしたり、生きてる実感さえもてなくなっている。体を十分動かしていないから、食欲もなく、寝つきも悪い。当然、色々なことに対する意欲も低下する。

ところで、日本では、戦後の経済発展とともに1960年頃から子ども社会が崩壊し、1980年代には、子どもの生活のあり方、特に遊びは上述のように深刻な状況を呈してきた。一方、今の中国はかつての日本の状況と非常によく似ている。1979年から始まった改革開放により、中国は急速に経済が発展し、社会のあり方が劇的に変化してきている。当然、その結果は人々の生活にも強い影響を与えているが、それは子どもの遊びついても例外ではないと思われる。では、その遊びの現状はどうなっているのであろうか。

田中敏明ら（1998）は、小学校５年生の子どもをもつ日本、中国、韓国の親を対象に、子どもの生活と育児について行った実態調査の結果を報告している。その中で僅かではあるが子どもの遊びに関しても触れている。それによると、休日の過ごし方として「家の外で兄弟や友達と遊ぶ」が日本65.3％、韓国47.0％であるのに対して中国は22.9％と顕著に低くなっている。一方、「家の中でひとりで遊ぶことが多い」では、日本15.3％、韓国17.5％に対して中国40.7％と逆に非常に高くなっている。なお、「ひとりで勉強していることが多い」も日本8.2％、韓国23.8％に対して中国51.8％と極めて高い割合を示している。田中らは「ひとり遊び」が多い背景として、兄弟数の少なさ、塾に行くことなどが、また「勉強」が多い背景としては、親の高学歴を期待する傾向などが関係していると考えている。

遊びの内容については、全体として、日本と韓国では戸外遊びが多く、特に日本ではボールゲーム、自転車などの運動遊びが目立つが、中国では玩具、トランプ、ゲームなど、女児で縄跳びが多いことを除くと、室内での静かな遊びが多いということを指摘している。

テレビ視聴については日本、韓国に比較して中国の子どもの視聴時間が長い傾向にあることを示唆してはいるが、実際にどのくらいなのかは具体的には示されていない。

これらの結果から、中国の子どもは日本や韓国の子どもに比べて家の中でひとりでテレビを見たり、静かな遊びをして過ごしていることが多いといことが窺わ

れる。しかし、調査の対象はあくまでも子ども本人ではなく、親であり、質問項目も少なく詳しいことはわからない。

一方、リズワンら（1996）は、中国・新疆ウイグル自治区の区都ウルムチの小学校４年生の子どもを対象に彼らの日常生活について様々な角度から調査が行った。この中で遊びに関しても調べている。その結果を見ると、学校で「仲のいい友達」が７人以上いるという子は日本の子どもでは60％以上であるのに対してウルムチの子どもでは16.2％である。また、家の近所で「仲のいい友達」が７人以上という子は日本37.4％に対してウルムチ26.7％である。どちらの場合も「仲のいい友達」をたくさんもっているという子の割合は日本のほうが高い。したがって一見すると、日本の子どものほうが友達の数が多いように考えられる。しかし、「いつも家に帰って何人ぐらいで遊んでいますか」という質問に対して７人以上という子は日本では5.0％に過ぎず、68.2％が３人以下となっている。これに対してウルムチの子どもでは７人以上が19.3％で、３人以下は日本の子どもの半分以下の31.7％である。この結果からすると、実際にふだん親しく遊んでいる友達の人数はウルムチのほうがはるかに多いのではないかと推測される。

グリシェンら（2004）も中国・新疆ウイグル自治区の区都ウルムチの中心部と郊外の小学校の５、６年生を対象に心の健康と生活について調査し、その中で遊びについてもいくつか興味深い事実を明らかにしている。それによると、「放課後、近所で一緒に遊ぶ」子の人数は、中心部の子も郊外の子も10人以上が３分の１程度を占め、「ひとりで遊んでいる」という子は中心部の子で4.4％、郊外の子では2.4％に過ぎない。また、異年齢の友達との交流は中心部の子で69.4％、郊外の子で65.9％である。因みに日本の子どもの場合、同じ質問に対する割合は４年生で33.1％、６年生で32.3％である（宗像市教育委員会、1999）。さらに、この調査では、友達関係の深さをみるために「友達が良くないことをした時に注意することがあるか」尋ねているが、「よく」「時々」を合わせ中心部の子の90.7％、郊外の子の90.1％が「ある」と応えている。日本の５、６年生の場合、これは67.8％に過ぎない（福岡県、2002）。主に遊ぶ場所については中心部の子どもでは60.8％が、郊外の子どもでは76.4％が「外」で遊ぶと応えている。テレビの視聴時間については、１時間以内が中心部の子どもで63.4％、郊外の子どもで76.4％である。３時間以上視聴している子はどちらも少ない。ゲーム機については、ウルムチの子どもの場合も持っている子はいるが、その割合は日本よりはるかに低く、それを使って遊ぶ時間も短い。

この２つの調査から中国・新疆ウイグル自治区の子ども達の遊びの様相についてはかなり理解することができる。しかし、ウイグル民族は漢民族と民族が異なるだけではなく、漢文化の影響を受けながらも様々な地理的、歴史的、宗教的な背景によって、独自の文化を形成し、中国の他の地域の状況とかなり異なる部分がある。したがって、中国の子ども達の遊びの実態を明らかにするためには、まず他の地域、特に人口比において大きな割合を占める漢民族について調査する必要があるではないかと思われる。

こうした理由から、本研究では漢民族が90％以上を占めている地域を選び、子どもの遊びの実態をいくつかの側面から探ってみようと思う。

Ⅱ．研究の方法

１．調査の対象

中国江蘇省南京市内の２つの小学校に在籍する４・５年生計473名（男258名、女215名）。南京市は、人口約623.8万人。但し、市区の人口は443.5万人である（2000年、中国第５回全国人口調査より）。南京市は江蘇省の省都で、かた長江中・下流域における政治、経済、文化の中心地である。民族は主に漢民族であるが、他に回、壮のなど51の少数民族も住んでいる。

２．質問紙の内容と構成

調査は質問紙によって行われた。質問項目は福岡県青少年課青少年アンビシャス運動推進室が2001年に実施した「子どもの遊び意識調査」、「情報機器等使用実態調査」の質問項目から１部を抜粋し、質問紙を作成した。なお、中国の実情に応じて、若干表現を変えたところもある。この質問紙は次の14項目によって構成されていた。

１）遊ぶ友達の人数に関する質問　２項目
２）友達との関係に関する質問　７項目
３）遊び場に関する質問　１項目

４）情報機器による遊びに関する質問　３項目
５）外遊びの時間に関する質問　１項目

３．調査の手続き

調査は、集団実施法で行った。指示は担任教師によって行われた。その際、子ども達に必ず次のような説明をしてもらった。

１）この調査は、無記名で、学校の成績とは一切関係のないこと。
２）全ての情報は統計的に処理されること。

また、子ども達が質問紙に回答している時、教師の期間巡視を控え、書いている内容を見ないようにしてもらった。

４．調査の時期

2004年６月上～中旬にかけて実施した。

Ⅲ．結果と考察

１．遊ぶ友達の人数

子ども達が学校と近所でよく遊ぶ人数を調べるために「学校でよく遊ぶ友達は何人くらいですか」と「近所でよく遊ぶ友達は何人くらいです」という２つの質問を用意した。

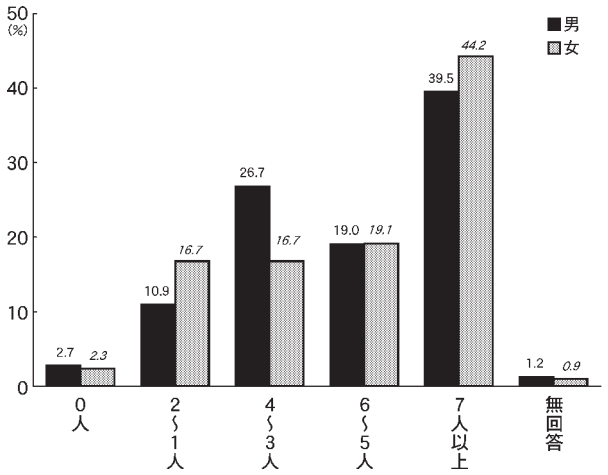

図１　学校でよく遊ぶ友達は、何人くらいいますか

図１は、学校でよく遊ぶ友達の人数を示したものである。男子の場合「７人以上」が最も多く39.5%を占め、次いで「４～３人」が26.7%、「６～５人」が19.0%の順となっている。「２～１人」は10.9%、「０人」にいたっては2.7%と100人に３人弱程度に過ぎない。

女子の場合も男子と同じく「７人以上」が最も多く、44.2%を占め、次いで「６～５人」が19.1%、「４～３人」が16.7%の順に続き、「２～１人」は16.7%、「０人」は2.3%となっている。「４～３人」以上と回答した人数を合わせてみると、男子85.2%、女子80.0%と80%を越えている。なお、日本の子ども達の場合、「４～３人」以上は３・４年生で85.9%、５・６年生で89.3%を占めている（福岡県、2002）。南京の子ども達とそれほど大きな違いはない。

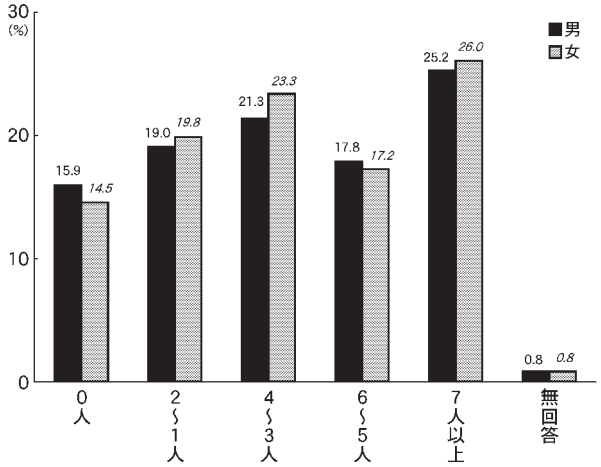

図２　近所でよく遊ぶ友達は、何人くらいいますか

図２は、近所でよく遊ぶ友達の人数を示したものである。４・５年男女とも、「７人以上」が最も多く、男子で25.2%、女子で26.0%を占め、次いで「４～３人」、「６～５人」の順に続き、「２～１人」は20%弱である。「０人」は男子15.9%、女子14.5%と学校の場合より高く、近所に友達のいない子が10人にひとり以上いることになる。なお、「４～３人」以上を合わせた数値は、男子64.3%、女子66.5%で、学校の場合よりかなり低くなっている。これらの事実は地域での子ども同士の交流が学校より少ない傾向にあることを物語っているとみてよいであろう。

この結果を中国・新疆ウイグル自治区の区都ウルムチの子ども達の実態と比べてみると、「10人」以上がウルムチの５・６年生では30%以上もおり、南京の小学生の「７人以上」より顕著に高い。また、「いつも１人で遊んでいる」子はウルムチの小学生では、僅かに2.4～4.4%に過ぎない（グリシェンら、2004）。

一方、日本の子ども達の場合（福岡県、2002）は「７人以上」が３・４年生で12.1%、５・６年生で10.3%と、南京の子ども達より低い。また、「４～３人」以上を合わせた割合も３・４年生で55.4%、５・６年生で

61.9%と南京の小学生のほうが高い傾向にある。このように見ると、南京の子ども達の地域での友達の人数はウルムチの子ども達ほど豊かではないが、日本の子ども達よりまだいくらか多いようである。

2．友達との関係

一緒に遊ぶ友達は、子どもにとって、非常に大切な存在である。その友達関係の実態を調べるため「だれとでも友達になれる方ですか」「友達が良くないことをした時に注意をしてやることがありますか」「友達と言い争ったり、けんかをしたことがありますか」、「友達とけんかしても仲直りすることができますか」「他の子が遊んでいる時、自分から声をかけて仲間に入れてもらうことができますか」「ふだん年上や年下の友達と遊ぶことがありますか」「親友が何人いますか」という7つの質問を用意した。

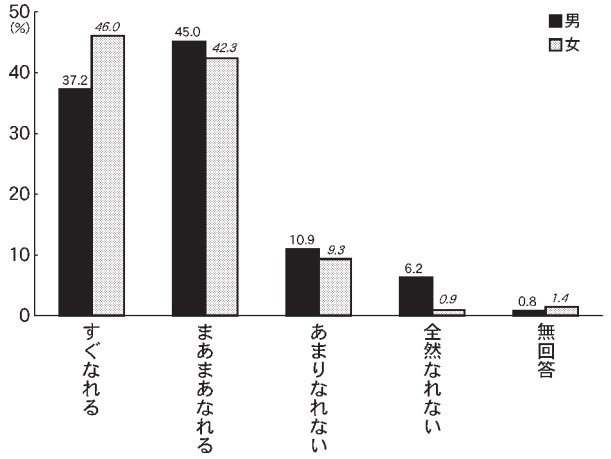

図3　だれとでも友達になれる方ですか

まず、図3は「だれとでも友達になれる方ですか」という質問に対する結果である。4・5年男子では、「まあまあなれる」が最も多く、45.0%を占め、次いで「すぐなれる」37.2%、「あまりなれない」10.9%の順に続き、「全然なれない」は6.2%である。一方、女子では「すぐなれる」が最も多く46.2%を占め、次いで「まあまあなれる」42.3%、「あまりなれない」9.3%の順に続き、「全然なれない」は僅かに0.9%である。「すぐなれる」について、女子は男子より10%以上高く、逆に「全然なれない」について、女子は男子より低い。この結果からすると、南京の小学生の場合、女子は男子より友達をつくる能力が高いようである。

同様の質問についての日本の子ども達の結果（福岡県、2002）では、「すぐなれる」が3・4年生で33.8%、5・6年生で26.3%で南京の子ども達より低い。

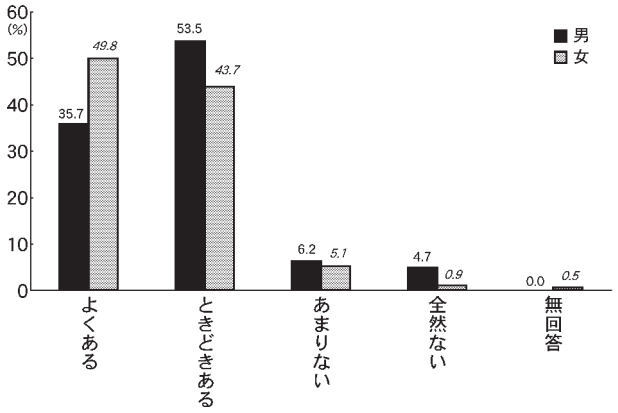

図4　友達がよくないことをした時、注意をすることがありますか

図4は、友達関係の深さを調べるため、「友達がよくないことをした時、注意することがありますか」という質問をした結果を示したものである。男子では、「よくある」35.5%と「ときどきある」53.5%を合わせ、「ある」が90%近くを占めている。反対に「あまりない」6.2%と「全然ない」4.7%は合わせても10.9%に過ぎない。女子では、「よくある」49.8%と「ときどきある」43.7%とを合わせ93.5%に達している。「あまりない」と「全然ない」は合わせても6.0%に過ぎない。男女いずれにしても友達が良くないことをした場合、知らぬふりをするのではなく、注意するという子が少なくないようである。

なお、男女の比較では「よくある」の割合が女子49.8%に対して、男子35.7%と女子が10%以上高く、「全然ない」の割合も低い。これからすると、男子に比べ女子のほうが友達に注意する子が多いと言える。

同様の質問についてのウルムチの小学5・6年生の子ども達の結果（グリシェンら、2004）では、「よくある」「ときどきある」を合わせて90%以上の子が「ある」と答えている。この結果は、南京の子ども達の場合とほぼ同じであった。

一方、同様の質問に対する日本の子ども達の結果（福岡県、2002）は、「よくある」「ときどきある」を合わせ、3・4年生が66.4%、5・6年生が67.9%と南京の子ども達より20%以上も低い。

子どもは本来自己中心的で、しかも社会性が未熟な

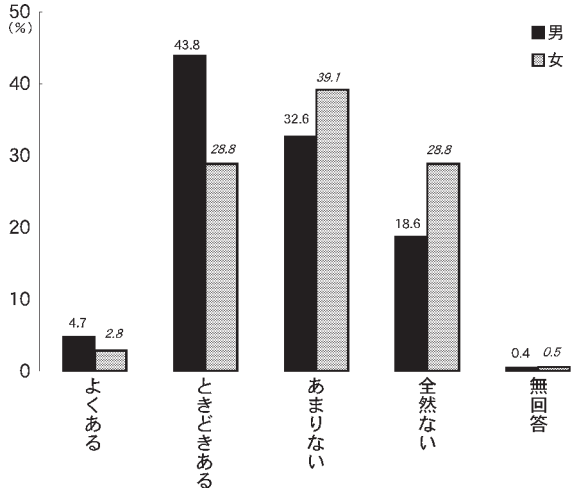

図５　友達と言い争ったり、けんかをしたことがありますか

ために、友達関係にあったとしてもときには喧嘩をするものである。図５は「友達と言い争ったり、けんかをしたことがありますか」という質問に対する結果である。男子では、「ときどきある」が43.8％で最も多く、「よくある」は4.7％と少ない。しかし、合わせると48.5％となる。残りの51.2％が「あまりない」「全然ない」と答えている。

女子では、「よくある」と「ときどきある」を合わせ、31.6％が「ある」と答えている。残りは「あまりない」ないし「全然ない」であった。

「ある」と答えている子は男子のほうが女子より12.2％多い。反対に、「ない」は女子の方が顕著に多い。女子に比べて男子のほうがよく友達と言い争ったり、けんかしたりしている傾向にあるようである。

同様の質問に対して、日本の子ども達の場合（福岡県、2002)、「よくある」「ときどきある」を合わせて３・４年生が59.8％、５・６年生が61.7％となっている。この数値は南京の子ども達より高い。なお、男女の傾向については南京の場合と同じである。

図６は、「友達とけんかをしても仲直りすることができますか」という質問に対する結果である。男子では、「すぐできる」が62.6％で最も多く、次が「まあまあできる」の24.4％であった。「あまりできない」と「全然できない」は合わせても10.9％に過ぎない。女子も「すぐできる」が71.6％で最も高く、次が「まあまあできる」の20.9％であった。「あまりできない」と「全然できない」は合わせても6.5％で男子よりも少ない。

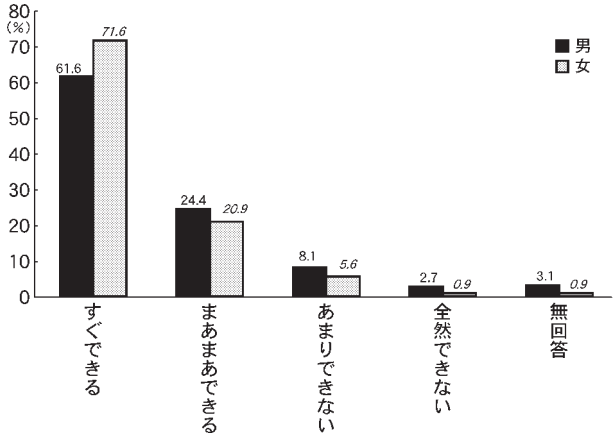

図６　友達とけんかをしても仲直りすることができますか

男女の比較では「すぐできる」が女子のほうが男子より10％も高い。そして逆に「できない」では男子のほうが若干多い。男女どちらにしても「仲直りできる」子は多いが、この結果からすると、その傾向は女子のほうがより強いようである。

同様の質問に対する日本の子どもの結果（福岡県、2002）では、３・４年生が「すぐできる」「まあまあできる」を合わせて87.9％、５・６年生が92.8％となっている。この数値からすると、日本の子ども達と南京の子ども達で大きな差はないようである。

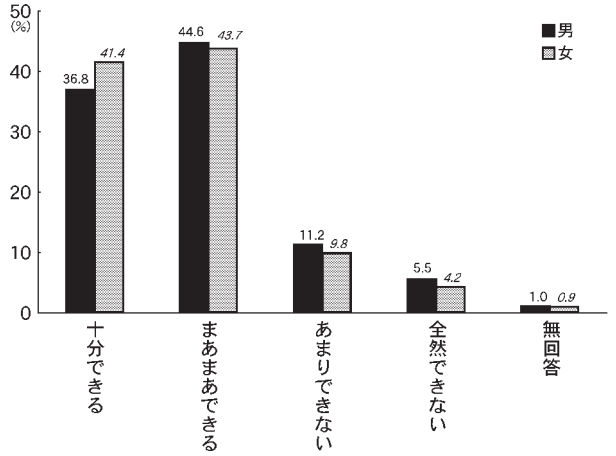

図７　他の子が遊んでいる時、自分から声をかけて仲間に入れてもらえますか

図７は「他の子が遊んでいる時、自分から声をかけて仲間に入れてもらえますか」という質問に対する結果である。男子では、「まあまあできる」が44.6％で最も多く、次が「十分できる」の36.8％で、両者を合わせると81.4％に達する。一方「あまりできない」は11.2％、「全然できない」は5.5％とどちらも多くはな

いが、それでも「自分から声をかけられない」子が合わせて16.7%いることになる。女子も男子と基本的には同じ傾向であるが、「十分できる」と答えている子が4.6%ほど男子より多いことが注目される。

同様の質問に対する日本の子どもの結果（福岡県、2002）では、「十分できる」「まあまあできる」を合わせて３・４年生が82.9%、５・６年生が82.5%である。また「あまりできない」「全然できない」は合わせて３・４年生が14.8%、５・６年生が16.6%である。これらの数値を見ると、日本の子どもの実態は南京の子どものそれと非常に類似していると言える。

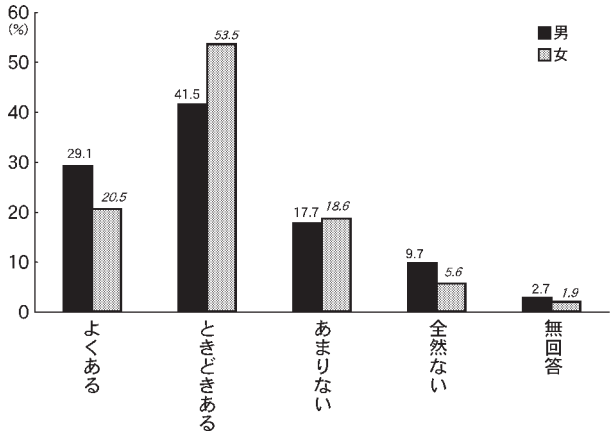

図８　ふだん年上や年下の友達と遊ぶことがありますか

図８は「ふだん年上や年下の友達と遊ぶことがありますか」と尋ねた質問の結果である。男子では、「ときどきある」が41.5%で最も多く、次が「よくある」の29.1%で、合わせて70.6%の子が「ある」と答えている。これに対して「あまりない」「全然ない」は27.4で３割弱を占めている。女子も男子と同様「ときどきある」が53.5%で最も多く、次が「よくある」の20.5%であった。両者を合わせると、74.0%となる。これに対して「あまりない」「全然ない」は合わせて24.2%であった。

これに関してウルムチの小学５・６年生の子ども達についての調査（グリシャエンら、2004）では「よく遊ぶ」「ときどき遊ぶ」を合わせて、ウルムチ郊外の子で65.9%、中心部の子で69.4%となっている。南京の子ども達の結果と比べて、中心部の子ではあまり変わらないが、郊外の子どもではやや低くなっている。

一方、日本の子ども達の場合はどうであろうか。福岡県宗像市教育委員会（1999）の調査では、「家に帰ってから一緒によく遊ぶ友達は次のどれですか」という質問に対して「学年の違う友達とも遊ぶ」を選択した子は４年生で33.1%、６年生で32.3%であった。問い方違うので直接比較できないが南京の子ども達に比べて異年齢での交流はかなり少ないのではないかと推測される。

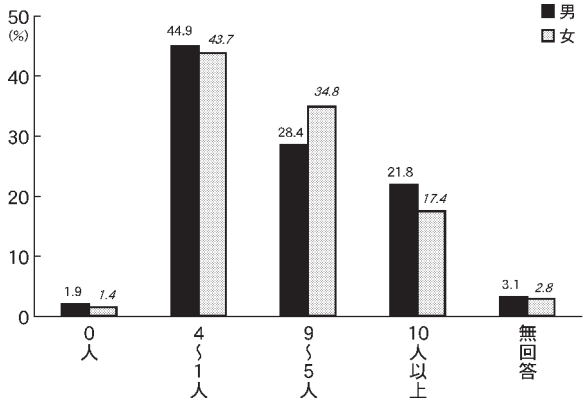

図９　あなたは、親友が何人いますか

図９は「親友が何人いますか」という質問に対する結果である。この質問では具体的な数字を書いてもらった。男女とも「１～４人」が最も多く、次いで「５～９人」、「10人以上」、「いない」の順となっている。

３．遊び場

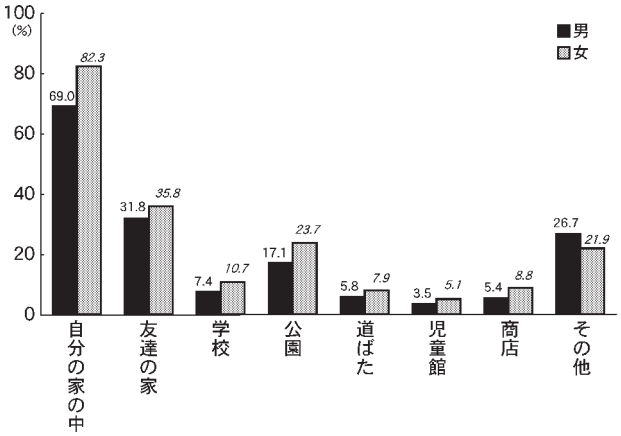

図10　放課後にどこでよく遊んでいますか

図10は「放課後にどこでよく遊んでいますか」という質問に対する結果である。この質問では当てはまる回答すべてをマークしてもらうようにした。男女とも「自分の家の中」が最も多い（男子69.0%、女子82.3%）。次に多いのは「友達の家」で男子31.8%、女子35.8%となっている。「その他」は男子26.7%、女子

21.9%、「公園」は男子17.1%、女子23.7%である。「学校」、「商店」、「道ばた」、「児童館や児童センター」を挙げている子は、男女とも10%以下である。性別では、女子の「自分の家の中」の割合が非常に高いことが注目される。

ウルムチの子ども達の場合、郊外の５・６年生で76.4%が、中心部の５・６年生で60.8%が「地域」で遊ぶと答えており、家の中で遊ぶ子は極めて少ない(グリシェンら、2004)。

同様の質問に対する日本の子どもの結果（福岡県、2002）では、学年や性別をこみにしての数値であるが、「自分の家の中」が70.0%で、南京の子ども達の場合とほとんど同じ割合を示している。しかし、「友達の家」については65.5%で南京の子ども達よりはるかに高い。こうした数値からすると、日本の子ども達は南京の子ども達以上に家の中で遊ぶ傾向が強いのではないかと推測される。

４．情報機器による遊び

下山田裕彦ら（1991）は、1980年頃からの時期を日本の子どもの遊びの革新時代(伝統的遊びの崩壊時代)と指摘しているが、今や日本の子ども達の遊びは室内でのテレビ、テレビ・ゲーム、パソコンなど情報機器を使っての遊びが中心になっている。

今日、南京の子ども達の場合も前述のように、外より家の中で遊ぶことが多くなっている。彼らは家の中で何をして過ごしているのであろうか。おそらくそこで行われている日本と同じように情報機器を使っての遊びではないかと思われる。そこで、この実態を見るために「テレビゲームをして遊ぶことがありますか」「ふだん（月～金）１日に平均してどのぐらいゲーム機で遊びますか」「ふだん（月～金)、１日に平均してどのぐらいテレビをみますか」という３つの質問を用意した。結果は図11のとおりである。

「テレビゲームをして遊ぶことがありますか」という質問に対して、「ある」と答えている子の割合は男子51.2%、女子9.8%で、男子が圧倒的に多い。

では、ふだん平均してどのくらいの時間、テレビゲームをしているのであろうか。この結果を示したのが図12である。これによると、「全然していない」が男子で62.8%、女子で87.9%と最も多い。している子の中では「30分」が目立つが、それでも男子で17.4%、女子

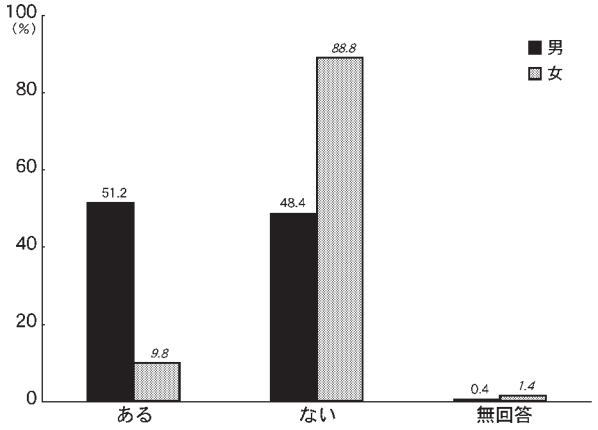

図11　テレビゲームをしてあそぶことがありますか

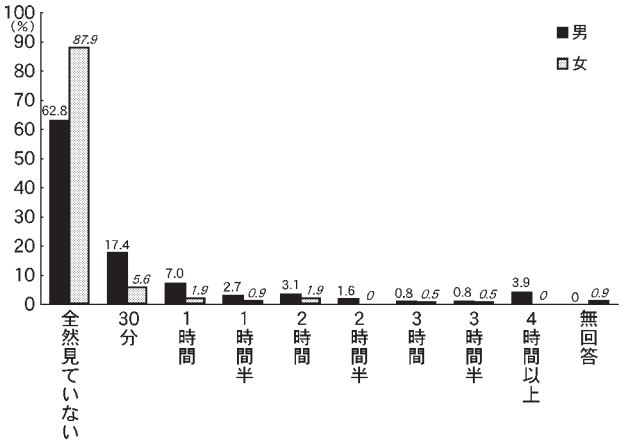

図12　ふだん１日平均してどのぐらいテレビゲームをしますか

で5.6%に過ぎない。この結果からすると、テレビゲームをしたことが「ある」と答えてはいるが、実際に毎日している子はかなり限られているのではないかと推測される。

日本の子どもの場合、福岡県（2002）の調査によると、80～90%の割合で何らかのゲーム機を持っており、その子ども達の26.3%、すなわち４人に１人が「ほぼ毎日」ゲームをしていると答えている。そして、５年生の場合、１日30分程度という子が21.6%であるのに対して１時間30分以上遊んでいる子が50.7%もいる。

日本では、テレビゲームなど情報機器による過剰な遊びは、子どもの発達に望ましくない影響を与える恐れがあるとして大きな問題となっている。しかし、南京の子ども達の実態はこうした日本の子ども達の結果と比べると、まだそれほど深刻でないように思われる。

図13は「ふだん（月～金曜日)、１日に平均してどのぐらいテレビを見ていますか」という質問に対する結

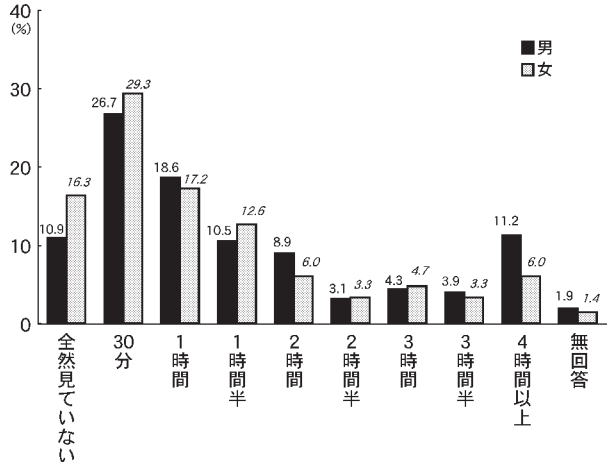

図13　ふだん１日平均してどのぐらいテレビをみていますか

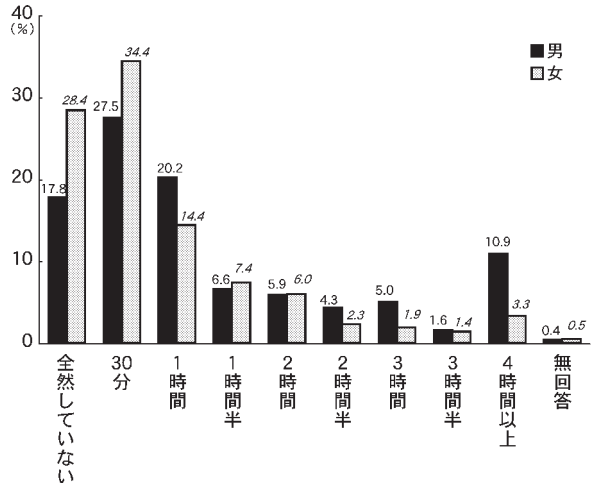

図14　ふだん(月～金)、１日に平均してどのくらい外で遊んでいますか

果である。男女とも「30分」が最も多く、「１時間」がこれに続いている。３時間以上見ている子は男子で19.4%、女子で14.0%である。一方、１時間以内は男子で45.3%、女子で46.5%となっている。「全然みていない」という子も男子で10.9%、女子で16.3%いる。男女別では女子のほうがあまり見ていない子が多い。

これに対してウルムチの小学５・６年生では３時間以上が郊外の子で15.3%、中心部の子で11.8%となっている。この数値は南京の子ども達とあまり変わらない。しかし、１時間以内でみると郊外の子が52.4%、中心部の子が63.4%と、どちらにしても南京の子ども達より多い。また、「まったく見ていない」子は郊外の子が4.1%、中心部の子が3.7%と南京の子より少ない。こうした数値からすると、テレビの視聴時間はそれほど長くないが、テレビを見ている子どもはウルムチの子ども達のほうが南京の子ども達より多いようである。

一方、日本の子ども達の場合、福岡県宗像市教育委員会（1999）の調査では、１日３時間以上見ているという子が小学６年生で63.9%もいる。反対に「全く見ていない」という子は0.6%に過ぎない。この結果と比べると、南京では長時間視聴の子ははるかに少ないと言えよう。

５．外遊びの時間

日本の子ども達の遊びは、「外遊び」から「室内遊び」へと変化してきている。遊び場の結果から見ると、南京の子ども達についても同じ傾向が見られた。このことをさらに確認するために本調査では「ふだん(月～金曜日)、１日に平均してどのぐらい外で遊んでいますか」という質問を設けた。図14はこの結果を示したものである。

これによると、男子では「30分」が27.5%と最も多く、次いで「１時間」の20.2%、「全然していない」の17.3%、「４時間」の10.9%と続いている。30分というのは、子どもが夢中になって時間を忘れて遊ぶにはあまりにも短い時間であり、ほとんど遊んでいないに等しい。そこで、この「30分」と「全然していない」を合わせてみると、44.8%に達する。これに対して「２時間」以上遊んでいる子は27.7%、３人に１人弱である。

一方、女子では「30分」が34.4%で最も多く、これは男子と変わらないが、次に「全然していない」の28.4%がきて、その後に「１時間」の14.4%、「１時間半」の7.4%と続いている。「30分」と「全然していない」を合わせた割合は、62.8%を占めている。これに対して「２時間」以上遊んでいる子は男子より10%以上低い14.9%である。

性別では、「全然していない」が男子の17.8%に対して女子では28.4%と10%程度高くなっていることが注目される。

この調査が実施されたのは、６月上旬から中旬という子ども達が外で遊ぶには非常に気候の良い時期である。しかし、これらの結果からすると、南京の子ども達の中には男女とも外で遊んでいない子がかなりいると言えよう。

以上の結果をまとめると、およそ次のことが言える。

１．一緒に遊ぶ友達の人数について

南京の小学４・５年生が学校で遊ぶ友達の人数は、３人以上が男女とも80％を越えている。友達が全くいないという子は極めて少ない。これに対して、地域の友達は３人以上が男女とも60％台で学校より明らかに少ない。友達のいない子も15％程度いる。ウルムチおよび日本の子どもとの比較では、地域の友達の人数はウルムチの子ども達ほど豊かではないが、日本の子ども達よりは多いようである。

２．友達との関係について

男女とも、南京の80％以上の子は、だれとても友達になれるし、他の子が遊んでいる時、自分から声をかけて仲間に入れてもらうことができる。また、90％以上の子は、友達がよくないことをした時は注意をするし､喧嘩をしても仲直りすることができる｡さらに70％以上の子がふだん異年齢の友達と遊んでおり、50％以上の子が親友を５人以上もっている、ということがわかった。しかし、その一方で、自ら友達づくりができない子が10％強、異年齢の友達と遊んでない子も20％強がいることが明らかとなった。

なお、男女の比較では若干割合に違いが見られた。すなわち、女子のほうが｢喧嘩体験｣以外は、｢だれとでも友達になれる｣｢自分から仲間に入れる｣｢異年齢の子と遊ぶ｣｢友達に注意してやる｣｢喧嘩しても仲直りできる｣の全ての項目で男子より割合が高かった。

ウルムチや日本の子ども達との比較ではどうであろうか。友達に対する注意ではウルムチの子と南京の子でほとんど違いがない。しかし、日本の子ども達とではかなり結果が異なっている。南京の子ども達のほうが注意する子どもの割合が顕著に高い。異年齢の子ども達との遊びは、南京の子ども達のほうが日本の子ども達よりまだかなり行われているようである｡｢自分から仲間に入れる｣｢喧嘩しても仲直りできる｣について日本の子と南京の子でほとんど差がない。

３．遊び場について

遊び場としてウルムチの子では「地域」が圧倒的に多い。これに対して日本では「自分の家」と「友達の家」を挙げる子が際だっている。一方、南京の子ども達の場合、｢自分の家｣が最も多いという点では日本と共通しているが、｢友達の家｣が30％台で、日本のまだ半分程度であるということが注目される。しかし、この結果は、南京の子ども達の遊びの舞台が「外」から「内」に移行しつつあることを示唆していているように思われる。

４．情報機器による遊びについて

日本の子どもの場合、１日１時間30分以上テレビゲームで遊んでいる子が50.7％もいる。これに対して南京の子ども達では男子の過半数、女子の10％が遊ぶことがあると回答している。しかし、実際にはふだん全然していないという子のほうが多い。しているとしても１時間30分以上ろいう子（男子）は日本の４分の１の12.9％に過ぎない。

テレビ視聴についても日本の子ども達に比べるとはるかに短い。全然見ていないという子も男子で10.9％、女子で16.3％いる。しかし、その一方で、４時間以上見ている子が男子で10人に１人いることに注目したい。

５．外遊びの時間について

南京の子ども達は、男子の17.8％、女子の28.4％がふだん外遊びを「全然していない」と答えている。外で遊んでいる子も１時間以内が男子で47.5％、女子で38.8％を占めている。先の遊び場の実態と合わせて考えると、南京の子ども達も日本の子ども達と同じように外より室内で過ごす時間が多くなってきているのではないかと推測される。しかし、南京の子ども達の場合、テレビゲームで遊んだり、テレビを見る時間も日本の子ども達ほど多くはない。彼らは室内でどのような遊びをしているのであろうか。今後の１つの課題は、こうした遊びの内容を詳しく調べてみることである。

引用文献

小塩節　1997　遊ぶ子の美しさ　教育と情報、No.470、2-5、第一法規出版

北九州市教育委員会　2000　北九州市家庭教育意識調査

グリシェン・アブリミティ、横山正幸　2004　ウイグルの子ども達の心の健康と生活　教育実践研究　第12号　219-226.

下山田裕彦･結城敏也（編）　1991　遊びの思想―遊びの理解と人間形成　川島書店

青少年文化研究会　1996　子どもたちの生活世界　伊藤忠記念財団調査研究報告書　No.30.

田中敏明・照屋博行　1998　日本、中国、韓国の子ど

もの生活と子どもを持つ親の育児―幼児と小学５年生を持つ親を対象とした実態調査―　文部省科学研究費補助金による大学間協力研究（研究代表者　田中敏明）研究成果報告書・少子化時代における子どもの生活、文化、環境に関する日中間比較分析的研究　1-22.

南京市ホームページ：http：//www.nanjing.gov.cn

平井信義　1989　新しい幼児教育のために　新曜社

福岡県　2002　子どもの遊び意識調査報告書

ベネッセ教育研究所　1999　子どもたちの遊び　モノグラフ・小学生ナウ　Vol.19-1、ベネッセコーポレーション

宗像市教育委員会　1999　宗像市の小学生の生活と意識の実態

山添正(編著)　1992　心理学から見た現代日本の子どものエコロジー　文化･教育風土･社会環境　ブレーン出版

リズワン・アブリミテイ、横山正幸　1996　ウイグルと日本の子どもの日常生活の比較　福岡教育大学紀要　第45号　第４分冊　339-361.